

第138回 三方限古典塾（'18, 4, 19）

呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その11）

- 1 直友は得難し。而るに吾また拒むに過ちを諱むの声色を以ってす。佞人は少なからず。而るに吾また接するに諛を喜ぶの意態を以ってす。嗚呼、日に悪に入らざらんことを欲するや難し。（人情） 231

（意訳） 過ちを直言してくれる友人は得がたい。ところが、いやな顔つきをしてその直言を拒み避けようとする。現実には、言葉巧みに諂いすり寄ってくる人間は少なくない。

ところが、媚び阿ってくるのを、やに下がって喜び受け入れようとする。ああ、これでは悪の道に入るまいと思っても難しいのではないか。

（余説） 過ちは誰でも犯しがちです。「過ちて改めざる、是を過ちと謂う」（論語・衛霊公）でもあります。過った時に自分で気づいて改めることができればよいのですが、それがなかなかできにくいのが人の常です。そのときに遠慮せずに直言してくれる友がおれば有り難いのですが、それもなかなか難しいのが現実です。

この問題は、権力の座か、それに近いポストにいる人ほど深刻です。昨年からの森友問題に係わる国会の混乱がそれを如実に示しています。古今東西、それで墓穴を掘った人がいかに多かったかは歴史が教えています。その座にある人は、阿諛追従の徒を見分ける見識だけは是非とも磨いて、同じ過ちだけは繰り返さないでほしいものです。

- 2 真機、真味は涵畜せんことを要す。点破すること休かれ。その妙は窮まりなく、言もて諭すべからず。聖人の言うことなき所以なり。一たび口頬を犯さば、窮年にも説き尽くさず。また離披澆漓して、一些の咀嚼する処なし。（性命） 26

（意訳） ものごとにある、微妙で深い趣きや味わいなどというものは、心の裡に納めておくべきである。それを無理に言葉で説き明かそうとしてはならない。なぜなら、それらは極めて奥が深く、言葉で表現するようなことは不可能だからである。

孔子のような聖人が、言葉で教えることをためらった理由もそこにある。もし一度口を開いて説明しようとするれば、一生かかっても説き尽くすことはできないし、意味がばらばらに乱れて脈絡がなくなり、せつかくの深い味わいまで失われてしまうだろう。

（余説） 世の中には、科学のように合理的に説明できるものの他に、宗教の教義、武道や芸道の極意、神話や童話・おとぎ話の世界、経営の機微や勘などのように、言葉では到底説明できない非合理的なものも多々あります。「心の外に刀なきなり、敵と相対する時、刀に依らずして心を以て心を打つ、是を無刀と謂ふ」（幕末の剣豪・山岡鉄舟の言葉）

サン＝テグジュペリ著「星の王子さま」では、キツネが王子へ「かんじんなことは、目に見えないんだよ。心で見なくては。」、と教えます。目には見えないものも、人にとって欠かせない大切なことであり、それらを心で見るとべきことを説いています。

（参考） 論語・陽貨 16「天何をか言はんや、四時行はれ、百物生ず。天何をか言はんやと」

（天は何も指導していないけれども、四季は自然とめぐり、諸物は生育しているのではないか。天は何も教えていないのだぞ）

3 両物交われれば必ず声あり。兩人交われれば必ず争いあり。声あるは両つながら剛なるが故なり。両つながら柔なれば則ち声なし。一は柔に一は剛なるもまた声なし。争いあるは両つながら貪なるが故なり。両つながら譲れば則ち争いなし。一は貪り一は譲るもまた争いなし。抑もこれより進むあり。一柔なれば以って剛を馴らすべし。一譲なれば以って貪を化すべし。 (修身)246

(意訳) 二つの物がぶつかれば、必ず音をたてる。二人がぶつかれば、必ず争いが起こる。音をたてるのは、両方とも固いからである。両方が柔らかいなら音はたたない。一方が固くても一方が柔らかいなら、やはり音はたたない。

争いが起こるのは、双方とも欲が深いからである。双方とも譲るなら、争いは起こらない。それよりもさらに望ましいのは、柔らかい方が固いほうを軟化させ譲ることで欲深い相手を感化させることである。

(余説) “いのちの詩人”と称せられる相田みつをの「セトモノとセトモノと ぶつかりっこすると すぐにこわれちゃう どっちかがやわらけければだいじょうぶ やわらかいところをもちましよう そういうわたしはいつもセトモノ」と同じ趣旨です。

参考にある老子や菜根譚を読んでも、相田の詩の終わりを見ても、大切なことほどそれを実践するのは簡単なことではありません。でも、頑張ってみましょう。

(参考) 老子・下 68「善く士たる者は武ならず。善く戦う者は怒らず。善く敵に勝つ者は与にせず。善く人を用いるはこれが下と為る。是れを不争の徳と謂い、是れを人の力を用うると謂い、是れを天に配すと謂う。古えの極なり。」
菜根譚・前 13「経路の窄き処は、一步を留めて人の行くに与え、滋味の濃かなるものは、三分を減じて人の嗜むに譲る。此れは是れ、世を渉る一の極安楽の法なり」

4 天下国家の存亡、身の生死は、ただ敬意の両字に係る。敬すれば則ち慎む。慎めば則ち百務修まり挙ぐ。怠れば則ち苟めにす。苟めにせば則ち万事隳れ頽る。天子より以って庶民に至るまで、かくの如くならざるはなし。これ千古の聖賢の兢兢たる所にして、亡人の必ず由る所なり。 (存心) 47

(意訳) 天下国家の存亡や身の生死は、ただ敬と怠の二字に関係する。敬すれば慎み、慎むと全ての務めはうまく修まり行われる。怠れば一時しのぎとなり、全てが敗れ壊れる。天子から庶民に至るまでこのようにならないものはない。これは大昔から、聖人賢者が戒め恐れ慎むところであり、滅亡した人々は必ずこれによっているのである。

(余説) この条のポイントは「敬」です。敬とは、己を慎み、他を敬うという自他両面があります。佐藤一斎の「言志四録」には「妄念を起さざるは是れ敬にして、妄念怒らざるは是れ誠なり」とか「敬すれば則ち心清明なり」など数多く述べられています。政治に携わる方々には、敬の心を忘れずに身を慎み、国を滅亡させないよう願いたいものです。

(参考) 中庸 20「その人存すれば、則ちその政挙がり…」(挙がり：よく行われるの意)
呻吟語・存心「備ふるの心は、これを慎むの心なり…。もし備を恃みて慎まずば、則ち備は吾の怠りを長ずるものなり…。」
朱子語類 9「学者の工夫、ただ居敬・窮理の二事に在り」(内には慎んで徳を積み、外には物事の道理や法則を求めること。朱子学を中心課題の一つ)